

特集…流人の文学

小野篁

呉羽 長

(くれば・すむ)

一 小野篁隠岐配流と篁の詠草・漢詩句

隠岐の流人小野篁をめぐる文学という場合、篁が隠岐配流に関わって作った和歌、漢詩句といった作品と、篁の隠岐流謫をめぐる同島で固有に伝えられる説話の類をあげることができる。本稿では、篁の隠岐配流の経緯をふまえて、それぞれの文学のありようとその関係について明らかにしていきたい。

まず篁の隠岐配流の経緯と配流をめぐる篁の詠草・漢詩句について示す。

承和元年（八三四）一月、小野篁は第十七次遣唐使節の副使を拝命した。彼は大使の藤原常嗣（つねつぐ）（第一船に座乗）とともに承和三年五月、同四年四月の二度にわたって第二船に乗り唐に向けて船出したが、いずれも暴風に

遭って渡航を果たせなかった。同五年、三度目の渡航を企てている折、大使常嗣は先の漂廻で船体の一部が破損、浸水した自らの乗船を他の船と代えるよう上奏し、これを受けた朝議の卜定の結果、篁の第二船と代えられることになった。これに憤った篁は病と称して乗船せず、「西道謠」なる詩を作って遣唐使をめぐる朝議の態度を批判した。十二月、その詩を見た嵯峨上皇は篁の無礼に激怒し、よって篁は律に照らして死罪と定められたが、罪一等を減ぜられ隠岐国へ流されることになった（『続日本後記』承和五年十二月十五日の条）。こうして篁は承和六年正月より、同七年二月の赦免の令を受けて都へ帰った六月まで、一年六ヶ月の間、隠岐の流人として過ごすことになる。

この隠岐配流に関わって篁が詠んだ歌としては、ま

ず、「おきのくににながされける時に舟にのりていでたつとて」という詞書をもつ、

わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人になつげ
よあまのつり舟 『古今和歌集』巻第九羈旅四〇七

(引用は『新編国歌大観』に拠る)

を挙げることができる。この歌には、篁が京を発つて摂津難波から瀬戸内海に船出する際の詠という解(松田武夫氏『新釈古今和歌集』、小沢正夫氏『古今和歌集』小学館日本古典文学全集など)が見られるが、そうした解は、『今昔物語集』巻第二十四第四十五に、篁の「わたのはら」の歌詠出の事情に付して、

明石と云ふ所に行きて、其の夜宿りて、九月許の事なりければ、明髻あけぼのに寝られて詠め居たるに、船の行くが島隠れ為るを見て、哀れと思ひて此くなくむ読みける。

ほのぼのとあかしのうらのあさぎりに

島かくれ行く舟をしぞおもふ

(新潮日本古典集成成本の本文に拠る)

という記事のあることによるところが大きい(注1)。し

かし篁が京から隠岐へ下ったとする場合、当時の山陰道の組織や駅馬制(「延喜式」「兵部省」参照)から考えて、山城から丹後・但馬・因幡・伯耆を通り出雲の千酌ちくみから船に乗り隠岐の周吉すけ(現島後の隠岐の島町)へ至ったとするのが正しい(注2)。

ただし、篁が三度目の遣唐使船に座乗を拒み隠岐配流が定められた際京に帰っていたという記録はなく、太宰府において朝議の決定・宣旨を受けたものと考えるのが妥当である。その場合、太宰府から長門、山陰道に入り、石見・出雲を経て千酌に至り隠岐へ渡ったものと想定できる(注3)。『和漢朗詠集』巻下「行旅」所収の

渡口の郵船は風定しづまつて出づ

波頭の謫処は日晴れて看ゆ

(書き下しは日本古典文学大系本に拠る)

(六四四)

という詩句は、謫処たる隠岐へ船出しようとして渡し場から海を隔てた島々を望み見た折の作と解されているが、「わたのはら」の歌と同様、千酌から日本海に向けて漕ぎ出そうとするときの詠であろう(注4)。なお、右「渡口の郵船は」の詩句は、隠岐配流の際篁が作った「謫行吟」七言十韻の詩の一節と想定される(川口久雄

氏『和漢朗詠集』講談社など。この「謫行吟」は京に伝えられて人々の胸を打ち広く愛唱されたという。

この篁の隠岐の暮らしについては、『古今集』に「おきのくににながされて侍りける時によめる」という詞書で、

思ひきやひなのわかれにおとろへてあまのなはたき
いさりせむとは
(巻第十八雑下、九六一)

という、上陸後に我が身の上を慨嘆する歌が残されている。また『和漢朗詠集』巻上には、

物の色は自ら客の意を傷ましむるに堪へたり
宜なり愁の字をもて秋の心に作れること (二二四)

という句があり、配所にあつて目に入るあらゆるものが嘆きの種となり、漢字を弄ぶ中であらためて我が身の不遇を感じざるを得ない心象を読み取ることができる。

右のほか、漢詩句一連(後述)を除き、篁の隠岐配流に関する詠草等で、都側の文献に記されるものはない。

それは、都の人々にとっては篁が隠岐へ流謫したという悲劇的事実こそが問題であつたという事情によるものである。

二 在隠岐小野篁伝説の概要

一方、島根県隠岐郡の海士町(島前)、同隠岐の島町(島後)では、小野篁の遠流に関わる悲哀とは別に、この間の話が島固有のものとして伝えられており、そこでは篁は「篁さん」と呼ばれ親近の情をもつて遇されている。例えば島根大学昔話研究会編『隠岐・島前民話集』(昭和五二・三)には次のような語りが収録されている。

a 小野篁さんがその、船からあがつてね、船からあ

がつてその、のどが乾いて水を所望したんです。その時家が少ないからね、ある家へ行って、

「水を飲まして下さらんか。」

言つて水を請うたわけだ。

ところがその時のおばあさんがいうには、水がその、野田は水があんまないところでね、飲料水の。井戸も二つ三つあるけれどもごり水でね、ごく水が悪いです。それでこの当時のおばあさんが水をさしあげながら、その水のまねな物語にね、

「ここは、この部落は水が、飲み水がごくまねで、

井戸をもっておるけれども水が乏しい。」

て言つてね、水のまねな話をひとくさりしたわけだ。

「その井戸へ案内をしてくれんか。」

て言つて、それからおぼあさんその井戸へ案内してね、それから篁がね、

「いつも出て来ぬせど川水のこいべをめでてなおながし」

て言つて、パンパン拜んでね、そして

「おぼあさん、こいで水がちよつとでもよけになるけんの。」

て言つてお礼にその、言う。

で、その井戸がね、十月からは水が減る。比較的水が減つて。何故減るかというと、十月はこの、出雲へ、大社へその、神々、全国の神々さんが酒造りに行くつていう伝説があつてです。で、酒造るその酒の水にその、水がいるから、そいで水が十月からなんぼ雪が降つても雨が降つてもようけたまらなない。そいで一月からまたようけたまつてくるいうですだ。

い。
(語り手は明治二十五年生まれの男性、海士町豊田 在)

b 不動権現ちゅうこの、権現さん、その大きな仏像さんを、小野篁さんちゅう人が刻まれたですわ。その仏像を。

そうした時に、その、木だから、けずった、そのへらがね、井戸の中へ飛びこんで、井戸があつたの、大きな。そこへその、けずったものが飛びこんで、そいつが鮎になったですわ。鮎になつて昨年まであの、おりましたに、井戸を改築したために死んでしまつただけん。沢山おつたけどね。

小野篁さんちゅう人がきざまれた仏像さんは、今でも、その、昔、ま、お寺みたいなもんですね、廃止をしたさな、全部。お寺を。焼きそうしてしまつて。ここだけあがつて、仏像を抱いて焼くあてにあがつたけれども、につこり笑われて、道を開いて多数かまえて行かれた人が、取り放したけれど、「わっ。」

と仏像さんが笑われたちゅうだ。そいで、もう手をかけだつちゅう。そいで残つとるですよ、ここに。

(語り手は明治十六年生まれ男性、海士町東 在)

これらを含めて島の人々が簗を身近に感じようとして
いる姿を見ることができ、それらの簗伝説は近世以
来の紀行・随筆、郷土資料、民俗研究等に記録されて
いる。これらを網羅することで簗の隠岐での姿の実態を把
握することができる(注5)。

ここに簗の在隠岐伝説の輪郭を示す。

簗は隠岐への配流の途中、美保関で隠岐に船出する哀
切の情を「わたのはら」の歌に詠み、島前に上陸、海士
町豊田に住んで専ら仏像を彫って暮らした。それらの仏
像は在島中、そして離島後も奇瑞を発した。また右の語
りにあるように豊田の野田(能田)地区の井戸に呼び水
し、豊田の在井権之介の娘と懇意になり子を成してい
る。

その後島後に移り(注6)、隠岐の島町上雨来(旧西郷
町)・那久(旧都万村)の光山寺などに住し、小路(旧五
箇村)願満寺の仁王像などを彫る。その間都万目(旧西
郷町)向田の娘阿古奈(阿古那)を愛するが、赦免の日
が来て帰京する。島に残る阿古奈に簗は一对の仏像を贈
り、この仏像は歯痛を癒すあごなし地蔵として今日に伝
わっている。

その他簗ゆかりの仏像・物品等多く島に残されてお

り、簗の末裔と称せられる人も少なくない。

(以上伝説の輪郭)

右のような簗在島の伝説は、そのほとんどが簗の遺
物・ゆかりと称せられるものを媒介に成立している。簗
の遺物・ゆかりとしては、腰掛け石・住居の旧跡・呼び
水の井戸・簗が使用した日常品・落胤・簗製作の仏像・
簗の詠草などがある。

簗伝説の多くはこうした物や人が現存することで成立
しており、十分な物語性を持つ話は少ない。それは、こ
れら伝説の背後に簗の悲劇的配流という史実があり、そ
の物語性に依拠することで個々の伝説が存在を主張して
いる故と解せられる。いわば都の高貴な風雅の人簗が不
幸にも罪を得て隠岐に流れ来、再び都へ帰っていくとい
う非日常的話を島の人々が自らに関わらせようとする意
識において島内の簗伝説が成立しているのである。彼ら
は簗の遺物・ゆかりとされる様々な要因をもって簗を身
近に感じようとする。前に掲げた海士町豊田の簗呼び水
伝説、東の不動権現をめぐる伝説も、呼び水井戸・不動
権現という媒介物を核として語りにおいて話者と簗・島
民と簗の隔たりの少なさを保っている。簗は「簗さん」
と呼ばれ人々の身近な存在として遇される。彼は島民の

長年の遺物・ゆかりの育みの中で高貴な人のもつ畏敬の対象という性格を親近なものに変容させてきたといえる。

ただしそうした親近性は篁が島の人々のレベルに引き据えられたことを示すのではない。彼らはあくまで篁に日常性から離れた貴人像、知恵才能の他に冠絶した超越者を見て自らに関わらせ、いわば篁を隠岐に來たるべくしてやって來たカミ（自民族に関わり、幸いを付与する靈）という意識において自らの祖靈的存在に擬そうとしている。篁來島は貴種流離譚の枠の中で捉えることができるが、島側から見ればそれは隠岐を暗いイメージで覆うことである。島の人々はそのような見方とは別に、彼らの立場から必然性をもって篁來島を捉え、その必然性において篁を従前からこの島に関わる人、いわばカミとして遇しているのである。

三 小野篁の彫仏と阿古奈伝説

隠岐の各地区では小野篁の仏像彫刻の話が伝わっている。篁の彫仏は實際は遠流を嘆く彼が帰京の切なる願いを込めた営みであったが、それを島の人々は自分たちに

対する好意的働きかけと解した。篁はこうした善意に支えられて彼の作った仏像に威力を吹き込み、それらの背後にあつて親しみ深い超越性を際立せる。一例として、前節bの語りのもとになった島前『金光寺山縁起』にみる篁像をあげることができる。同縁起では、篁が仏像を彫った木屑が鮎に化したこと、その仏像を山頂より落としたところ崖をよじ登ったという奇瑞譚を伝えている。

又承和の昔小野篁豊田にあり、一夜金光寺の山門より火光の出づるを見て、大いに異し、暁を待たずして寺を訪ひしに寺内寂然として人なく、唯地藏菩薩の厳しく安座するのみ、篁地藏に對ひ、一首の歌を詠じ、且つ仏火に導かれて寺に至りし意を告げ遂に一体の仏像を彫刻して奉納せられ、此の彫刻の際木片を池に投ぜられたる物鮎に化したりとて、此池の鮎を食すれば木の臭ひありと云ふ。又小野篁は常に登山して鬱を散じ寺内に宿り、文筆を弄び仏像を刻みたり、或時一座の木像を刻み山嶺懸崖より之を落し、若し性根あらはれ此の崖を攀じ登れといひしに、仏像は命のまま登り來りたれば、当時村民大に畏れ威信厚かりきと伝ふ。木像は廃仏の際焼損せ

しは惜しむべし。

『金光寺山縁起』

仏像を谷に投げ落とし崖をよじ登らせるといふ簗の行為に、この仏像（仏）に大きく優位する超越者像を見ることが出来る。金光寺山などの伝承を含めて簗の彫仏伝説は、島の人々が簗を身近な超越者として讃仰する態度を背景に成熟したものであったが、簗は島の人々の日々の祈りを受けとめてきた仏像（仏）たちの統括者として土地の信仰の中に生きている。彼はそうした仏像を多く作ったばかりでなく、前節aに示したように井戸に呼び水したり、また作った仏像の一つに歯痛治癒の靈験を与えたりなど様々な幸いを残して再び都（至高の世界）へ帰って行く。島の人々はそうした簗を、来たるべくして来訪したカミと見、その来島によって、来る以前もそして島を去つてからも時を貰いて自分たちの祖霊たる存在としていたのである。

訪れるカミたる貴種は来訪の際往々に土地の娘と結ばれる。その、色好み性と通ずる超越者のロマンを隠岐の簗も背負っているのであって、在井権之介の娘や阿古奈との恋にそうした姿を見ることが出来る。特に阿古奈の伝説は、簗の色好みのロマンを、島民の哀れを誘う悲恋

に成熟させたものといえる。阿古奈の伝説の由来を示す仏像は「あごなし地蔵」と呼ばれ、島後旧西郷町上西都万目の地藏堂に置かれている。これに関して、島で一般的に伝えられているものを次に掲げ概要を示す。

島後で簗は都万村那久の光山寺に住んだが、そこから五箇村の願満寺へ仁王像彫刻のため通う折都万目で休み、そこで向田の阿古奈を見初めた。二人は恋仲となつたが、その後簗に赦免帰京の令が下る。阿古奈は島を去る簗を港まで見送つたが、その折簗は阿古奈に二体の仏像を守り神として手渡した。この仏像は阿古奈にちなみあごなし地蔵と呼ばれ、以来島民の歯痛等首から上の病に靈験ありとして彼らの信仰を集め、今に至っている。

（横山弥四郎氏『隠岐の流人』昭和三十七年所収、渡辺宿鳳氏「あごなし隠無地蔵由来」）

なお、阿古奈の悲痛な思いを助長するかのようには島内では二人の間にできた子が夭折した由を伝えている。付加されたあごなし地蔵の靈験譚は、阿古奈の悲しみを島の人々が同情において成長させたものと解せられる。

阿古奈の伝説は、他の簗落胤伝説とともに彼の色好み

性を基底に置く祖靈的姿をかたどっている。篁は阿古奈伝説で際立たせられた「島を去る」イメージにおいてその高貴性を確保しつつ、島の祖靈的存在として語られる資質を持ち続けているといえる。

四 小野篁と篁伝説

前述したように、小野篁の隠岐配流は、都側から見ると貴種流離譚の枠の中で捉えることができる。都への召還の後の篁は、承和八年閏九月に旧位に復してから、刑部大輔・東宮学士・藏人頭・左中弁などの官を歴任し、承和十四年参議、仁寿元年（八五一）從三位に至っている。このような復位・昇進から見ても隠岐配流が彼の飛躍に資するところがあつた観がある。しかしそのような見方は篁にとって隠岐を受難の地とし、この島を暗いイメージで覆うことになる。隠岐の人々はこのような論理を遮断し、彼ら固有の生活意識・価値観において篁来島を解釈して、彼らの習慣・希求・好尚と関わる形で前述のような篁像を形成してきたのである。

篁が乗船を拒んだ遣唐使船はその任を果たし、大使常嗣は渡唐後承和六年八月に帰国、翌月節刀を返還してい

る。副使の責を放棄した痛みは篁を隠岐での不如意と共に暗く重苦しい記憶で苛むものであつたらう。隠岐の篁の姿が都側に掬いとられなかった所以は前に述べたとおりであるが、篁個人においても配流に関わる出来事は胸底に封印せざるを得ないものであつたかもしれない。

しかし、『和漢朗詠集』巻下「餞別」に次のような詩句のあることに注目したい。

万里に東に來らむことは何れの再日ぞ
一生西を望まむことはこれ長き襟ものおもひなり（六三五）

これは『倭漢朗詠集私注』（釈信阿）によると、篁が隠岐遠流を赦されて帰京する際に隠岐に来ていた唐客に寄せたものとされる（注7）。唐客との別離への思いは、隠岐を去る篁にとって唐客一人へのそれに止まらない。「今日別れを告げたなら、後私は一生この島国から西の海の彼方を眺めることでしょう。それは長く続く恨みの思いなのです」とは、「この島国」を今後篁の生くべき「京の都」に置き換えるとき、そのまま隠岐の人々に対する惜別の思いになる。篁は漢詩という表現形式をもって隠岐で心を交わした人々の哀別の声に応えたのではないか。

右のような解釈を試みると、篁像の広がりとともに、二つの文学の間の架橋が可能になるのではないか。

注1 この歌は『古今和歌集』巻第九羈旅に載せられるが、同集では「よみ人しらず」となっており、また左注には「この歌はある人の曰く、柿本人麿が歌なり」とある。

注2 『延喜式』「主計」では都から隠岐への行程を十八日と定めている（上り卅五日）が、篁が京から下ったものとすれば、その行程を辿ったのであろう。

注3 前稿（小野篁 都から隠岐へ）『解釈と鑑賞』平成十六・十二）では、隠岐への経路について、京から山陰道を通り出雲の千酌に出、そこから隠岐へ渡航したと想定したが、篁が承和五年に京に戻されていた記録がないことから、ここに示すような経路をより可能性の高いものとして提示させていた。

注4 隠岐の篁伝説ではこれを島根半島東端美保関での詠としている。

注5 隠岐の篁伝説の所収資料の詳細については、拙稿「隠岐の小野篁伝説考」（島根大学『山陰文化研究紀要』第二十四号、昭和五十九年三月）を参照いただければ幸

いである。

注6 拙稿（注5）を読まれた隠岐郡西の島町在住（当時）の松浦康麿氏が私宛昭和六十二年六月二十五日付の葉書で、当時「島前から島後へ簡単に移動出来たのか一寸疑問です」との指摘を下された。氏の指摘のように実際の移動が困難であったとすれば、島後及び島前でそれぞれ篁伝説が作られ、双方の伝承をもって篁の伝説とするために「移動」という形が自然と取られたものと推察される。

注7 なお『撰集抄』では、篁が隠岐に配流される時にこの詩を作り、これに感動した天皇が翌年篁を召還したとする。

——富山大学教授——